風化させない ③
71年目のヒロシマ

母の思いを次代へ紡ぐ

被爆体験伝承者

「チィちゃんは、（原爆投下から6日後に見つかった）お母さんの曲げていた足をゆっくり伸ばしてみました。ばらばら、何百匹というウジ虫がこぼれてきました」

広島市の平和記念資料館のシアタールームで、被爆体験伝承者の東野真理子さん(63)＝広島市安芸区＝が来場者約30人に話していた。内容は、母・竹岡智佐子さん(88)＝同＝の被爆体験で、「チィちゃん」とは母のことだ。

母の壮絶な体験を優しい口調で語る。静かに耳を傾ける聴衆の中には、涙をためている人もいた。平和資料館では、こうした被爆体験伝承者による講話が1日3回開かれている。

広島市は2012年度から、被爆者の体験を次世代へ受け継ぐ「被爆体験伝承者養成事業」を始めた。

伝承者に認定されるには3カ年の研修課程を修了しなければならない。1年目は被爆の実態や話し方の技術について講義を受け、2年目は伝えたいと思う証言を選び、原稿を作成する。3年目は講話実習をこなし技術を磨く。これまでに認定されたのは1、2期生の74人。年代は30～70代で、資料館などを中心に活動する。

母の体験を伝承する東野さん＝広島市中区の平和記念資料館

研修2年目の東みちるさん(45)＝広島市中区、教育関係自営業＝は、以前から興味があったが、知らない人の体験を語る自信がなかった。ある時、被爆者と伝承者について話をしていたら「ためらうことはないんじゃない？　応募したら」と勧められた。「被爆者は後世に伝えてほしいんだ」と思い、申し込んだ。シンガポールで生活していた経験を生かし、英語での原稿も作成している。

伝承者になった東野さんのきっかけは、母・竹岡さんから「私の証言を受け継いでくれるかね？」と頼まれたことだ。娘が受け継ぐことは当たり前だと思い、了承した。

東野さんは体験を受け継ぐ上で大切にしていることがある。戦争の悲惨さに憤りを感じた竹岡さんは戦後、アメリカや中国などの核保有国で体験を話し、核廃絶を訴えてきた。背中を長年見てきたこともあり「原爆の悲惨さや当時の様子だけでなく、大変な時代を生き抜いてきた母の強さまで伝えたいと思っている」と話す。

講話の最後は、こんな言葉で聴衆に語り掛ける。「皆さんの心に植えられた平和の種を大切に育ててください。世界平和は遠いところにあるのではなく、私たち一人一人の心がつくっていくものだと思います」。母から受け継いだ思いを胸に、自分の言葉を紡いでいく。

（鳴門支局・大城咲）